

記 録

文書番号	SCJ 第 23 期-290922-23340500—021
委員会等名	日本学術会議 史学委員会歴史学とジェンダーに関する分科会
標題	史学委員会歴史学とジェンダーに関する分科会記録
作成日	平成 29 年（2017 年）9 月 22 日

※ 本資料は、日本学術会議会則第二条に定める意思の表出ではない。掲載されたデータ等には、確認を要するものが含まれる可能性がある。

この記録は、日本学術会議史学委員会歴史学とジェンダーに関する分科会の審議結果を取りまとめ公表するものである。

(1) 本分科会の構成員

井野瀬久美恵(委員長)、姫岡とし子(副委員長)、小浜正子(幹事)、海妻佳子、桜井万里子、高橋裕子、永原陽子、平野千果子、松本直子、三成美保、長志津江、久留島典子、大日方純夫、小玉亮子、長野ひろ子、羽場久美子

(2) 分科会開催記録(計10回)

- 第1回:2014年12月19日(金)
- 第2回:2015年1月30日(金)
- 第3回:2015年6月5日(金)
- 第4回:2015年8月1日(土)(シンポ°ジウム当日)
- 第5回:2015年10月23日(金)
- 第6回:2016年2月10日(水)
- 第7回:2016年4月11日(月)
- 第8回:2016年6月12日(日)
- 第9回:2017年2月16日(木)
- 第10回:2017年5月19日(金)

(3) 活動内容概要。

1. 本分科会の活動の大きな力点のひとつは、第21期からの継続課題である「ジェンダーから高校歴史教育を見直す」ことに置かれている。第21期メンバーを中心に編集・刊行された『歴史を読み替える——ジェンダーから見た世界史』(大月書店、2014年5月)、『歴史を読み替える——ジェンダーから見た日本史』(大月書店、2015年1月)はその典型例であり、「歴史学とジェンダーに関する分科会」の大きな成果でもある。第23期分科会では後者を中心に書評会合を持ち、21期以降の活動の検証も試みた。2015年6月5日(金)に開催された第3回分科会では、以下の三名に評者を依頼している。

横山百合子(国立歴史民族博物館教授)

三谷博(日本学術会議連携会員)

平野千果子(日本学術会議連携会員)

主な論点は以下であった。

・ジェンダー視点によって歴史全体を叙述し教材として刊行した意義は大きい。

- ・家族構造をはじめとするジェンダーの問題が、国家や社会の支配関係や王権構造と深く関わっていることがよくわかった。
- ・ジェンダー視点をもった通史とはどのようなものか、その可能性はさらに検討していかねばならない。
- ・「ジェンダー規範の内面化」は重要な論点であり、植民地コンプレックスの議論も参照しながら、深めるべきである。
- ・グローバルヒストリーを叙述する中でどのようにジェンダー視点を入れていくかは、今後の課題である。
- ・これから重要性を増すであろう宗教に関する記述が少ないのも、今後の課題として継続審議する。
- ・現在語られる「ジェンダー論」には歴史的認識が不足していることが多々あり、本書の活用が望まれる。

2. 第23期(2014.10~2017.9)は、第22期学術会議史学委員会の活動のなかで提起された高校歴史教育の改革が、中央教育審議会での議論を通じて、大詰めを迎えた時期と一致する。この状況を踏まえて、高校歴史教育におけるジェンダー主流化はどうあるべきかが、本分科会の大きな議題となった。その試みのひとつが、公開シンポジウム「歴史教育の明日を探る——「授業・教科書・入試」改革に向けて」の開催(2015年8月1日開催、於：学術会議講堂)であった。以下はその概要である。

◆趣旨説明 井野瀬久美恵(日本学術会議第一部会員・甲南大学教授)

◆第一部 授業・教科書・入試 ～歴史教育改革を三位一体で考える～

○報告1 歴史教科書をどう書き換えるか?—ジェンダーの視点から: 三成美保

○報告2 高校歴史教育のあり方をめぐる議論: 久保亨(史学委員会委員長・信州大学教授)

○報告3 制度の壁か思考の壁か?—暗記オンリーでない歴史の試験をめざして: 桃木至朗(連携会員・大阪大学教授)

○コメント 現場の声をつなぐ: 小川幸司(長野県長野高等学校教頭)

◆第二部教材実例としての「慰安婦」問題～研究の到達点を踏まえた教育実践と市民の育成

○報告1 長志珠絵(日本学術会議連携会員・神戸大学教授)

○報告2 小浜正子(日本学術会議連携会員・日本大学教授)

○コメント ドイツとの比較から: 姫岡とし子(日本学術会議連携会員・東京大学教授)

◆総合討論 司会：井野瀬久美恵・平野千果子（日本学術会議連携会員・武蔵大学教授）

◆閉会の辞 久留島典子（日本学術会議第一部会員・東京大学教授）

上記シンポジウムの内容は、『学術の動向』（2016年5月）に特集として掲載された。前日には、2015年6月8日に出された文部科学大臣通知をめぐって、人文・社会科学と大学の将来を見据える緊急公開シンポジウムが行われており、ジェンダー史におけるジェンダー主流化の問題は、必然的に、人文・社会科学の振興の問題と関わることが意識された。シンポジウム自体が時宜を得た適切な内容であったこと、とりわけ教材実例として「慰安婦」問題を学術会議として初めて公式の場で取り上げたことには大きな意味があったこと、などが確認できた。

3. 第23期分科会としては、さらにもう一点、「理系のためのジェンダー史視点」をテーマに「提言」を作成することを念頭に置いて議論を深めてきた。この点については、以下のような意見が出された。

- ・「ジェンダー・ヒストリー・リテラシー」（とでも呼ぶべき概念）の必要性を提示することが重要である。
- ・広く現代におけるジェンダー史の意味を共有するために、キーワードとして、「ダイバーシティ、イノベーション、グローバル人材とジェンダー」等が考えられる。
- ・ジェンダー史の視点からの興味深い現象として、「自動車工学は男性の身体を念頭にしていることが、女性にむち打ち症を多く発症させる一因となっている」「家政学部出身の女性の建築家は早くから文理融合的環境科学の視点を備えていた」などが具体的に提示された。

4. 現代という時代にジェンダー史の視座がなぜ必要なのかを伝える提言作成の手がかりを得るために、2016年2月10日(水)開催の第6回分科会では、以下のゲストを招聘して報告いただき、関連する質疑応答を行った。

- 1) 「スポーツにおける身体への介入としての科学—性別確認検査を中心に—」
来田享子（中京大学スポーツ科学部教授）
- 2) 「マリー・キュリー——マイノリティはいかにして『勝利』したのか」
川島慶子（名古屋工業大学大学院工学研究科教授）

スポーツにおけるジェンダー平等を考えることは、現代世界をジェンダー史の視点からどう捉えるかと深くつながっているため、來田報告には次のような質疑応答、コメントの応酬があった。

- ・体育の授業には従来ジェンダー・バイアスが強かったが、現在はどうか。文科省のガイドラインはあるのか。
- ・体育も含めて、学校教育の場での身体の扱われ方には性別へのこだわりが強いが、そこにはどんな意味と問題点があるのか。
- ・スポーツにおけるセクシャル・ハラスメントについても意識化と研究が進んでいる。
- ・日本の女子団体スポーツでは、女性の監督就任が難しいのはなぜか。
- ・日本では高校野球や駅伝などの花形スポーツは男性中心である。アメリカでは、一般的に男子ほど人気のない女子バスケットをフェミニストが支えるという文化土壌がある。日本の状況はどうか。
- ・そもそも近代スポーツは男らしさを競うものとして始まり、女性は後から参入した。それゆえに、近代スポーツは本質的に女性へのハラスメント要因を内包している。と同時に、これは、スポーツができない/不得意な男性への抑圧ともなっている。
- ・2014年のユネスコ・スポーツ憲章と「女性スポーツに関するブライトン＋ヘルシンキ2014宣言」は、スポーツにおけるジェンダー平等に関して画期的な内容を持っている。

5. 高校歴史教育改革の審議が急速に進んでいる現状に鑑みて、高校歴史教育にジェンダー視点を有効に（＝生徒・教員双方の負担にならず、かつ歴史の本質を伝えるという意味で）導入するという specific な目的のため、分科会では以下の試みを行った。

- ・2016年6月12日開催の第8回分科会で、小川幸司氏（長野県長野高校教頭）より、『歴史総合（仮称）』と歴史系選択科目をめぐる議論について」と題して、中教審教育課程部会／社会・地歴・公民ワーキンググループの議論を伺った。中教審における議論の根底には、日本学術会議の提言が謳った「歴史基礎」科目の提案があり、その展開である「歴史総合」科目については、23期に提言『歴史総合』に期待されるもの」（2016年5月16日）がある。それらを踏まえた小川報告は、高校歴史教育の現場での展開を念頭に置いたという意味で、極めて現実的なものであった。これに関して以下のような意見が出された。
 - ・「知識よりも歴史的思考力を鍛えることが重要」という点については、ほ

ばコンセンサスができています。知識を構造化する力、歴史を構築する作法を身につけるのが、今後の歴史教育の課題である。

- ・「歴史総合」の論点のひとつは、古代（ないしは有史以前）から現代までの「通史」を教えることの是非にある。上記「提言」では、「通史」という言葉は使わず、主題学習でも時系列的な学習の実践が考えられている。
- ・本記録、上記2で示した公開シンポジウムの副題にあるように、入試制度のありかたは、新科目の成功と大きく関わっている。「世界史 A」が効果を挙げなかった反省を踏まえて、「歴史総合」を入試科目化するというのが「提言」の趣旨である。また、ある史料から何が言えるかを問う問題など、入試に可能な形式を工夫することも効果的だと思われる。
- ・たとえばシティズンシップや民主主義など、現代世界でキーとなる概念が歴史的に如何にして作り出されたかを理解することから、歴史的思考を体得する作法を身につけることは可能である。また、異なった地域や時代における社会的合意形成の方法を比較することで、知識を構造化し、他者認識の手法や意識を鍛えることもできると考える。
- ・小・中学校(義務教育)の授業と高校の授業、さらには大学の講義との連携をどのように組み立てるかは大きな課題である。それぞれの段階に応じた歴史的思考力を育てる手法が求められる。
- ・新科目実施のための研修プランについて、責任の所在を明確にして考える必要がある。中教審 WG の議論や学術会議「提言」は、教員養成や教員研修のあり方にも目配りしている。
- ・ジェンダーやマイノリティの視点を、「歴史総合」の大きな概念である近代化・大衆化・グローバル化を論じるなかで重視し、生かすべきである。
- ・歴史を暗記科目から批判的な思考科目へと転換するための一つの手法である「用語の精選」は、すでに現行の日本史・世界史各分野で取組が始まっている。
- ・中教審の WG 終了後、指導要領がどのように作成されていくかを引き続き注視する必要がある。

6. 上記、分科会での議論を経て、本分科会としての「提言」（仮題「歴史的思考力を鍛えるために—新たな高校歴史科目へのジェンダー史の導入」）の準備を行った。その目的は、現在作成途上にある高校の新歴史科目（「歴史総合」および「日本史探究」「世界史探究」）にジェンダー史の視点を具体的、かつ実践的に導入することにある。

23 期のうちに発出することはできなかったが、次期、24 期の早い時期に、歴史総合科目の実施に関わる議論に資する形で、提言発出することを考えて

いる。提言の具体的な中身についても、23期にすでに以下を議論している。

- ・「提言」の名宛人は文部科学省(初等中等教育局)とするが、広く教科書執筆者や現場教員にも読まれることを念頭に置き、新しい高校歴史教育科目に生かされるようにすること。
- ・「提言」の構成案は、以下のものである。

提言(案)「歴史的思考力を鍛えるために—新たな高校歴史科目へのジェンダー史の導入」

1. 作成の背景
2. 現状および問題点
3. 提言の内容 (各項目のタイトルは仮のものである)
 - (1) ジェンダーで鍛える歴史的思考力、ジェンダーで実践するアクティブ・ラーニング
 - (2) 比較史の視点を持ち、関係性を重視したジェンダー史視点を生かす
 - (3) 近代以前の理解を深める必要性
 - (4) 歴史科目以外の教科・科目との連携の要として
 - (5) 歴史的射程から LGBT を捉える重要性
4. 付録：ジェンダー史的アクティブ・ラーニングの事例案
 - (I) 「市民」とは誰か？
 - (II) 家族とは何か？
 - (III) 戦争
 - (IV) 工業化
 - (V) 移動
 - (VI) LGBT
 - (VII) 植民地支配
 - (VIII) 参政権
 - (IX) 教育

*上記の (I) (II) は「歴史総合」を、(III) 以下は「日本史探究」「世界史探求」を念頭に置いている。各項目は、「問い」とその「ねらい」から構成されるものとする。

なお、提言作成に際しては、歴史教育におけるジェンダーの重要性を、ジェンダー・ギャップ指数をはじめとする現代的エビデンスとも関連させて説明する必要が確認された。と同時に、①ジェンダーを地域間の関係性のダイナミズムのなかで捉えること、②多様なジェンダーのあり方をそれぞれの社会の階層と絡めて論じること、なども確認されている。

また、その際、ジェンダー史そのものの必要性をどのような言葉でわかりやすく表現するか意見交換も行い、以下のような発言があった。

- ・文科省・教科書会社・高校教員を含めた関係者に、高校歴史教育全体と関わる総合的な視点の下、授業内容の構成および方法の制度設計、入試

制度としての新テストなども、提言のなかに含める。

- ・グローバル人材育成には、ジェンダーではなく、「ジェンダー史」の視点が必須であることを説得的に示す。
- ・歴史教育を通じて女性の自尊感情を高め、エンパワーメントすることの重要性を滲ませる。

7. 上記、準備進行途上にある「提言」と連動して、歴史教科書の使用語句をジェンダー視点から見直し、書き換え、書き加える必要もある。この作業は、本分科会メンバーに加えて、本分科会から生まれた科研費の共同研究（代表：三成美保、2012～2014年度基盤B、および2015～2019年度基盤A）、比較ジェンダー史研究会と共同で行うことになる。

8. 2017年5月21日開催の西洋史学会大会（@一橋大学）における小シンポジウム、「思考力育成型歴史教育への転換と大学入試改革をどう進めるか」において、姫岡副委員長が「歴史教育とジェンダー」と題する報告を行った。この報告は、本分科会の成果、並びに上記関連科研費共同研究の成果を代表している。

9. 公開国際シンポジウム「歴史展示におけるジェンダーを問う」（2017年7月2日、於：国立歴史民族博物館）に対して、本分科会は、国立歴史民族博物館と共に主催した。